

●選評

観客の想像膨らませる

島 敦彦 金沢21世紀美術館館長

ユアサエボシさんは、戦前(1924年)生まれの架空の自分。福沢一郎に学び、シュールレアリスムの影響の色濃いカラーズや絵画を制作、83年に火災に遭い、わずかな作品とノートのみが残されるが、87年に死去。現代のユアサが、焼失ないしは行方不明の作品を再制作という設定だ。あり得たかもしれない重層的なうそを、戦中戦後の歴史と絡めながら、誠に不可思議なイメージとして提示、観客の想像を膨らませてくれる。

盛田亜耶さんは、毛細血管を思わせる切り紙による精巧な表現で注目された。植物と女性の身体あるいはダビッチの絵画に登場する手が混然一体となって融合する、異色の作品だ。気の遠くなるような作業の連続が独自の神秘性を獲得している。惜しくも選に漏れたが、抽象と具象のはざまで生起する、衣真一郎さんの軽快な中にも慎重な筆致の絵画も見えがかった。

過去と未来を逆転させ

藪前知子 東京都現代美術館学芸員

ユアサエボシさんは、戦前から活動していた「架空の画家」を、彼が生み出した作品を作り続けることで演じている画家である。彼の仕事は、過去と未来を鮮やかに逆転させつつ、作家という一つの主体が時代に対してなし得ることを問いかける。「具象」という様式が前衛の言語たり得た時代を参照しつつ、そこから現在を照射するユアサさんの受賞は、絹谷賞のメッセージとしても重要であると考えられる。

●選考過程 34人対象に

毎日新聞社が若手画家の作品に詳しい全国の美術館学芸員、美術評論家、ジャーナリストら56人に候補者の推薦を依頼、35人から回答があった。候補にあがったのは23歳から35歳の34人(うち1人は2人から推薦)で、候補者にはポートフォリオ(経歴や作品写真をまとめたファイル)を送ってもらい、事務局が選考委員3氏に発送。選考委員はそれらを精査し、開催中の展覧会で作品を鑑賞可能な場合は足を運んだ。

1月に実施した1次選考会は各委員が印象に残った候補を挙げ、今井、大坂、加茂、衣、唐仁原、盛田、ユアサの各氏について、表現の強度や将来性について個別に検討。衣、盛田、ユアサの3氏に絞り込んだ。その後、選考委員は候補のアトリエを訪問するなどして実作品をチェック。制作意図などについても話を聞いた。

2月の2次選考では、まずユアサが「構図やアイデアは他にはない魅力がある」「大学で美術教育を受けていないのもかえって力になっている」などとして本賞に選ばれた。衣と盛田は最後まで競った。衣は絵肌の魅力や絵画

技巧を凝らした切り絵で大画面を作り上げる盛田亜耶さんは、まず手を動かしてみるという、コンセプト先行の現在の絵画の流れにおいては反動的とも言えるが真摯な態度に評価が集まった。

評価基準としては実力とともにこの受賞が作家のキャリアにどのように影響を与えるかが重視された。その過程で、絵画体験が、現在の私たちの身体にいかにかきたものとして働きかけるかを追求し続ける衣真一郎さんの作品が最終候補として議論されたことも触れておきたい。

無名の作者の痕跡

斎藤芽生 美術家、東京芸大准教授

「無名の創作者の痕跡が、ある日ふいに発掘される」というロマンにユアサエボシさんはこだわる。絵が物語をはらむだけでなく、自己の設定自体を虚構として彼は絵を描く。キッチュな20世紀の広告画のような味わい、情報の欠落感、一抹の不安を誘うアンバランスさが魅力だが、それを支える構図は堅固。権威や王道に異を唱える作家の態度は得てしてそれらを表層的にのみ感じさせるが、彼は距離の取り方が独特だ。

絵画性はあらゆるささやかな物陰に潜在する、詩情は思いがけぬ街角に発生する、誰かの濃密な人生ののぞき穴はどんなところにもうがたれている……。無名の生のほろ苦さを丁寧に質感として拾い上げる深さがある。

奨励賞の盛田亜耶さんは圧倒的な「手」の思考の密度を評価。ジャンルとしての切り絵に陥らず、実感と抽象性を行き来しながら描く画家の身体を感じさせる。油彩に正面から向き合う、次点・衣真一郎さんと競り合ったの結果。

に対する向き合い方が評価されたが、手を動かすことによって表現を切り開いてきた盛田が画家を志す者へのメッセージにもなるとして奨励賞に選ばれた。

◇推薦された人たち

荒木名月、安藤圭汰、井田幸昌、糸川ゆりえ、今井麗、浦川大志、大坂秋加、笠井麻衣子、加茂昂、菊谷達史、木曾浩太、幸田千依、衣真一郎、近藤亜樹、斎藤杏奈、志賀絵梨子、篠原愛、田中里奈、玉那覇真希、唐仁原希、永沢碧衣、奈良田晃治、服部しほり、檜垣友見子、平川恒太、蛭田美保子、福田季生、松本和子、三輪恭子、盛田亜耶、八木佑介、矢野茜、山本雄教、ユアサエボシ

◇回答を寄せた推薦者

飯田志保子、伊藤匡、O JUN、翁長直樹、加藤義夫、川浪千鶴、北島洋一、鴻池朋子、小吹隆文、小松崎拓男、淡沢和彦、清水有香、正路佐知子、高階秀爾、中井康之、名古屋寛、西澤美子、野地耕一郎、押戸雅彦、原久子、土方明司、藤田一人、藤本真帆、保坂健二郎、堀元彰、牧口千夏、牧野裕二、三井知行、村田真、山口裕美、山下裕二、山中俊広、山本淳夫、和田浩一、渡辺亮一

(いずれも50音順、敬称略)

「架空の画家」演じて

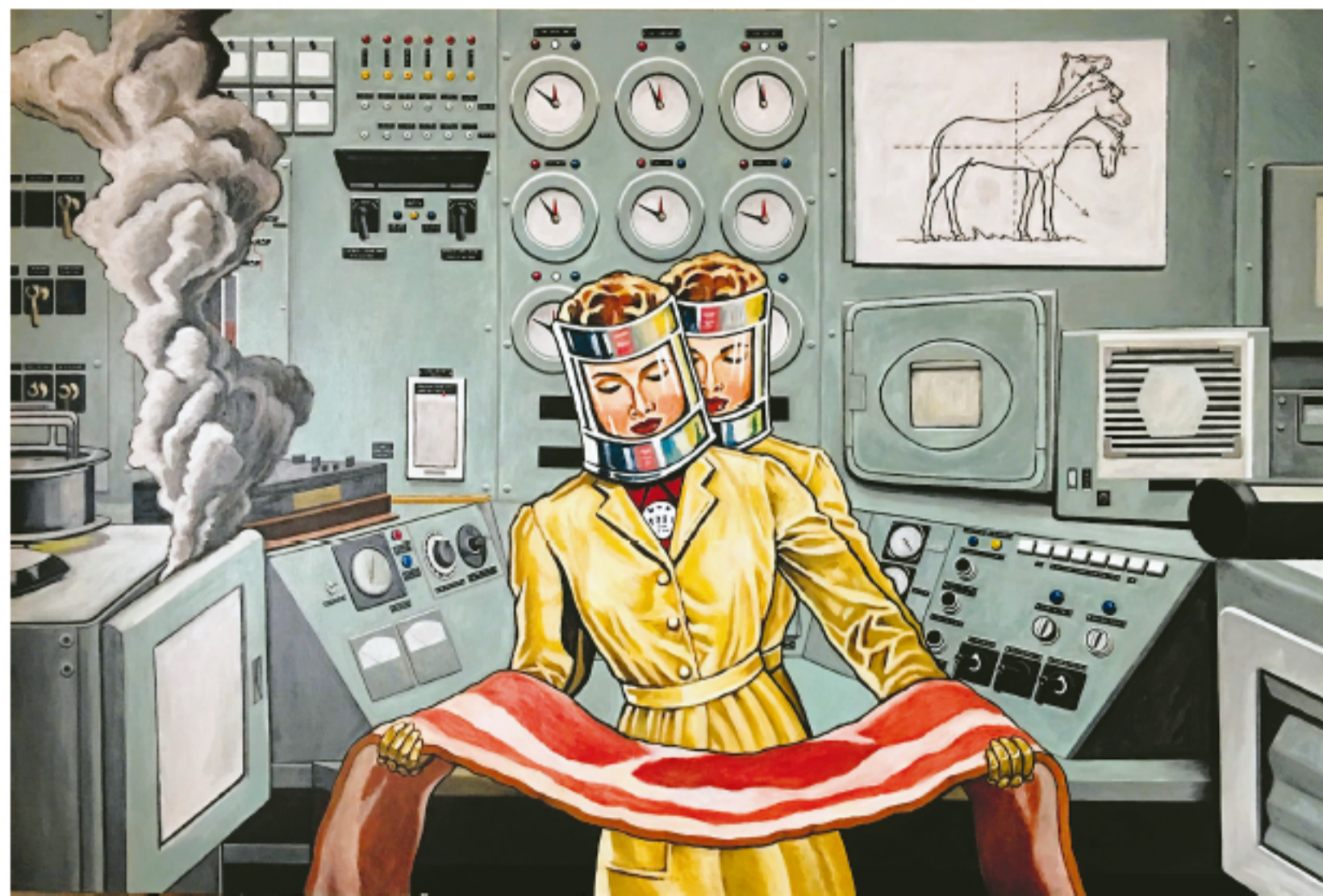
第10回 絹谷幸二賞

若手画家の意欲的な創作を応援し、具象絵画の可能性を開くことを目的にした第10回絹谷幸二賞(毎日新聞社主催、三井物産協賛)がユアサエボシさん(35)に決まった。奨励賞には盛田亜耶さん(30)が選ばれた。贈呈式は12日、東京都千代田区の学芸会館で開かれる。なお、絹谷賞は今回をもって終了し、10回記念特集を12日に掲載予定(一部地域を除く)。

【高橋咲子、永田昌子】

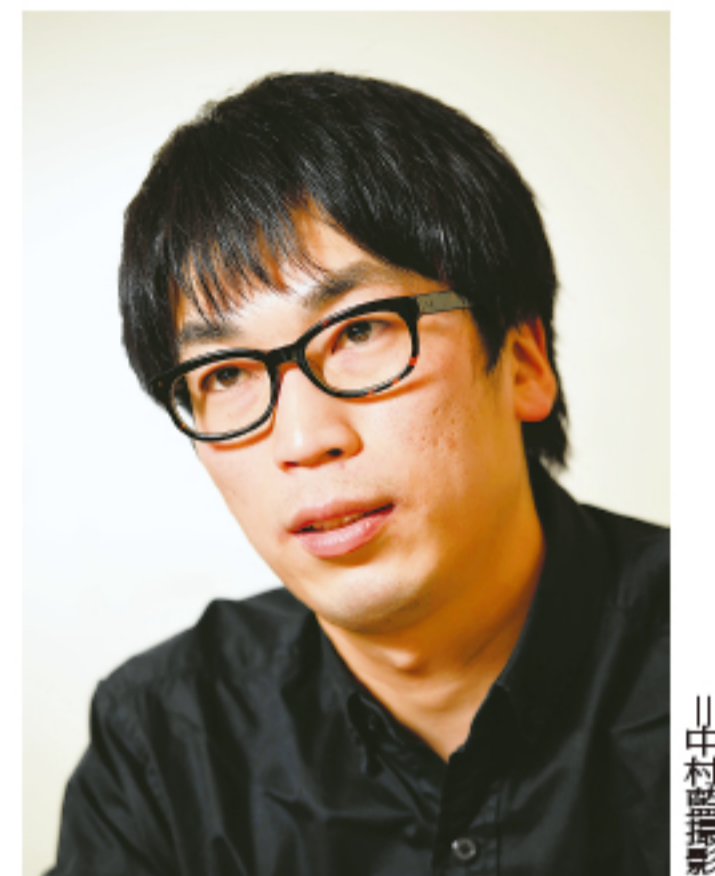
ユアサエボシさん

「美大を出ていない。描き続けてきて本がこもっている。絵はほぼ独学なの。当りよかった」 不条理で奇妙な場面を、隅々まで色彩を塗りこめ、グルーブ感で、より多角的に現代を見つめることができると思っています」



「女性工員 No.4」 アクリル・カンバス 2017年

「美大を出ていない。描き続けてきて本がこもっている。絵はほぼ独学なの。当りよかった」 不条理で奇妙な場面を、隅々まで色彩を塗りこめ、グルーブ感で、より多角的に現代を見つめることができると思っています」



山村隆彦撮影

本名・湯浅浩幸(ゆあさ・ひろゆき) 1983年千葉県生まれ。東洋大、東洋美術学校卒。2015年、千葉市芸術文化新人賞。

名画を身体化



「最後の晩餐—イエスの手」 切り絵、アクリル 2017年

奨励賞 盛田亜耶さん

昨春に大学院を修了し、年末にアトリエを借りたばかり。新たな門出を祝うかのように、奨励賞も手にした。切り絵で描く絵画だ。拡大コピーした下絵に黒い紙を重ね合わせ、デザインカッターで描線を一つ一つ切り出していき。カッターの刃はすぐにぼろぼろになるという。選考対象となった東京都港区のギャラリー・アートアンリミテッドでの個展名画の身体化では、レオナルド・ダビンチの「最後の晩餐」から、キリストや使徒の手を取りだした。手はやがて枝を広げ、根を生やす。作品の中で、人間と植物が分かちがたく同化している。学生時代に解剖学の授業を受け、人間の血管と植物の枝分かれに視覚的な類似があることに感銘を受けた。あることに感銘を受けた。専攻していた油絵で行き詰まっていたら、思いがけず、何かを乗り越えるのが好き。成し遂げた時に幸せを感じます。難しいからこそ、やってやろうと。いつか美術館の空間で作品を見てもらえるような作家になりたいと思っています。



山本明彦撮影

もりた・あや 1987年東京都生まれ。東京芸大大学院修了。卒業制作が同大の平山郁夫賞、修了制作が杜賞を受賞。

若手の創作支援 絹谷幸二賞



絹谷幸二賞は日本を代表する画家の一人で文化功労者の絹谷幸二さん(75)の写真が2008年の毎日新聞社に呼び掛かれて創設された。絹谷さんは1974年、具象絵画の登壇・安井賞(本社主催、96年度の第40回で終了)を引継ぎ受賞。画家として歩む自信を得た経験から賞の創設を思いついた。後進の指導に力も尽す。東京芸大名誉教授、大阪芸大教授、日本芸術院会員。35歳以下の画家を対象に、国内で前年に開かれた展覧会などで発表した具象的傾向の絵画を選考。賞金は本賞100万円、奨励賞50万円。